

〈研究ノート〉

論文における「問い」と「答え」の対応をめぐって

高 松 正 毅

Question and Answering Systems in Academic Papers

Takamatsu Masaki

1. 本研究の意義と目的

筆者は日本語学を専門とし、本務校である高崎経済大学経済学部においては選択必修科目である「論文の読み方・書き方」という講義の運営を任されている。この「論文の読み方・書き方」という科目を担当するにあたり突き当たった問題が、優れた論文を執筆するために、より良い問いの立て方の技術化・定式化ができないかというものであった。

論文の定義はさまざまにできようが、基本的には、学術的な問いに答えた文章であり、きちんと論証された文章である。したがって、問い（問題提起）と答え（結論提示）と、理由の説明（論拠提示）の三つが必須の要素となる。

出た結論なり下された判断は、問いに対する答えである。すなわち、何らかの判断が下され結論が出る際には、必ず問いが先行している。すなわち、論文を書く、つまり一定のテーマのもとに考究するには、どうしても「問いを立て（問題提起をす）」必要がある。そして、問いは主として疑問文によって述べられる。

ただし、「問題提起は疑問文による」というのは、厳密には正確ではない。問題提起が書かれる場合¹には、疑問文もしくは否定的な文で書かれるというのが正解である。否定的な文とは、「～（で）ない。」で終わる否定文はもとより、否定文に準ずる「～不適切である。」「～不十分である。」「～不当である。」等、また「～間違っている。」「～誤りである。」「～おかしい。」等、さらには「～すべきである。」等、現状に対する否定や変更の必要性を表明する文のことを指す。現在そう言われ、そう信じられていること、また現状に、何らの不満がないのであればあえて文章（論文）を書く必要はない。

1 「問い」もしくは「問題提起」が明示的には書かれない場合もある。そのことについて述べることで自身が問題意識の表れだからである。杉原厚吉が述べているとおり（次頁引用）、論文のタイトルでも、すべてが明示的に表されるわけではない。

すなわち論文とは、問いに答えたものばかりでなく、「そうではなく、こうである」と主張するものも含む。これは全く新たに何らかの問題を明らかにすることばかりでなく、今まで言われていることに対し、多少なりとも修正が加えられれば論文を書くに値するということである。そして前者よりも後者の方が執筆ははるかに容易である。

また、先行研究を渉猟する意味がここにもある。先人たちの遺業をたとえ一ミリでも前に進ませ深めることができれば、その論文には価値があると言って良い。

さて、筆者の到達目標は、優れた論文を書くための方法を見つけることである。そして、論文が問いに答えた文章であるのなら、良い問いを発することが優れた論文を書くことにつながるはずである。

杉原厚吉は情報処理学会の論文誌に掲載された論文を、そのタイトルから以下のW型、H型、その他の三つの型に分類した²。杉原が論文のタイトルの良し悪しを考えようとしていることから、杉原も問いの立て方が、何らかの意味で論文の内容そのものの有用性や価値につながると考えていたことが分かる。

W 型	「何を」と「なぜ」を含むタイトル、および「何を」のみを含むタイトル
H 型	「いかに」も含むタイトル（「…を用いた」「…に基づく」「…を利用した」「…による」など）
その他	「…に関するある考察」「…に関する一つの提案」「…について」など

杉原は「「なぜ」が含まれるものと含まれないものを区別しないで一緒にしたのは、この区別が必ずしも明確ではないからである。」と述べ、以下のように説明している。

「タイトル「あふれのない浮動小数点表示方式」を例にとって考えてみよう。このタイトルは、実は形のうえからは、ただ「何を」を述べただけである。しかし、世の中ではあふれが生じて困っているのだという現実を思い出したとき、タイトルの中の「あふれのない」という修飾語が「なぜ」この問題を取り上げたかという動機も表しているとみなすことができる。そう解釈して、上ではこのタイトルが「何を」と「なぜ」とを表しているとして扱ったのである。このように「なぜ」の部分がタイトルに含まれているか否かは、解釈の仕方によって変わる場合が多い。したがってここでは、両者を合わせてW型とよぶことにした。³」

そして、1994年～1998年の5年間に論文賞を受賞した論文22編のうち、約3分の2がW型であったことから、「論文のタイトルでは「いかに」は書かないで済むものなら書かないほうがよい。」とし、その理由として「「いかに」を書いてしまうと、世界で初めて解決したという主張がばけてし

2 杉原厚吉 (2001)『どう書くか——理科系のための論文作法』共立出版 pp.24-32.

3 前掲注2 p.30.

まって、すでに解決されている問題を別の方法でも解決できることを示したかのような印象を与えてしまうからである⁴。」と述べている。

ただし、「論文のタイトルには「何を」または「なぜ」を書く」といった決まりが存在しない以上、すべての論文のタイトルが問いを内包しているとは限らない。また、人文・社会科学系の論文では、問題の質が自然科学のそれとは異なることから、解決の方法も自然科学系の論文とは異なるはずである。

一般に理系の論文では、「何かをできるようにする技術（課題解決）」が述べられることが多い。そして、新たな論文が書かれると同じテーマを扱った論文は古いものとして乗り越えられていくのが普通である。それに対し、文系の論文では、内容的にも「どうしてそう言えるのかの説明（理由解明）」が多く、古いものが使い捨てにはならず蓄積されていく。たとえば、今日でも『古事記』を研究する場合には、本居宣長の『古事記伝』を避けて通ることはできない。

このために、人文・社会科学系では、現在言われていること、分かっていることに対する修正や付け足しでも論文として成り立ちやすいと言えよう。もちろん、何らの新見がない場合には単なるまとめになってしまうが、過去の蓄積が膨大である場合には、単なるまとめであっても後に続く者にとっては有用である。

さて、良い問いを発するための方法や技法など存在するのか。あるとすれば何をどうすれば良いのか。

ここで注意すべきことは、問いは論文を書く際ばかりではなく、学びにも重要であることである。疑問を持つことによって知識は増える。というより、一方的に与えられる知識よりも、自ら求め調べて得る知識の方が獲得定着しやすいであろう。知ることと考えることは同じではないが通じている。すなわち、良い問いを立てる方法が明らかになれば、論文執筆ばかりでなく、学習にも応用できると考えられる。

いかに問うかを通して、いかに知り・いかに考えるかを考える。同時にいかに答えるかを通して、いかに知り・いかに考えるかを考える。このことが筆者の課題である。

2. 良い質問の定義

優れた論文を書き上げるには、良い問いを発しなければならない。では「良い問い」とはいかなる問いを言うのか。特に他人に対して発せられる問いは、「質問」と言い換えて良いであろう。

日常生活では「良い質問だ」という言葉が発せられることがある。ジャーナリストの池上彰も

4 さらに杉原は、ミステリー小説が、たとえば密室殺人であることははじめに書くが、そのトリックはあとまで明かさないことを引き合いに出し、「論文のタイトルの場合にも、「何を」を書いて「いかに」を省略すると、中身がペールに包まれることになり、読者に、ちょっと覗いてみたい気持ちを起こさせる効果がある。特に「何を」の内容が大きければ、その効果も大きい。」と述べている。

「いい質問ですね」を多用することで知られている。

池上は津田大介との対談において、テレビ番組で「いい質問ですね」というフレーズを口にする際のタイミングとして、「台本にあるとおりに戻してくれる質問」と「その質問によってさらに分かりやすい解説ができる質問」の二つをあげている⁵。

前者は「自分にとって都合の良い質問」であり、後者は「視聴者や観客、聴衆にとって有益な質問」ということになる。すなわち、その質問が誰にとって良い質問であるかによって二つのケースを挙げている。

もちろん「自分にとって都合の良い質問」といっても、その都合の良さには様々な種類が存在し得るであろう。「よくぞ聞いてくれました。」という言葉もあるとおりに、言いたいことを言わせてくれる質問なら、すべて自分にとって良い質問と言えるに違いない。「視聴者や観客にとって有益な質問」というのも、「そのことは当然誰もが知りたくくなりますよね」という質問であるから、良い質問ということになる。

すなわち、誰かにとって良い質問というのは、語るべきことがらを十全に語ることを促してくれる質問と言って良いであろう。

本稿では、この「語るべきことがらを十全に語ることを促す質問」を「良い質問」と捉えることにしたい。厳密な定義は難しいが、問題の本質に迫り、思考をより極限近くにまで深化させてくれる質問が「良い質問」ということになる。

逆に言えば、「はい」や「いいえ」、一問一答式で答えられるような、あらかじめ正解が決まっている単なる知識や記憶力を試すテレビのクイズ番組のような質問は、良い質問とは言えない。その質問が出発点となって知りたいことや考えるべきことがらがさらに増えていくような質問、その質問が引き金となり、その問題のすべてが語り尽くされるような質問が良い質問ということになる。

3. 「疑問文」概観

ここで、疑問文とはいかなるものかを確認しておきたい。日本語と対照する意味で、英文法における疑問文の分類を一瞥する。英語では、「疑問詞を使わないもの」と「疑問詞を使うもの」の大きく二つに分けられる。

疑問詞を使わないものが諸否疑問文、疑問詞を使うものが疑問詞疑問文に当たる。これらとは別に付加疑問文（反復疑問文、押念）、文中に「あれか、これか」の答えを入れる選択疑問文、修辭疑問文（反語）、間接疑問文がある。

付加疑問文は諸否疑問文と、選択疑問文は疑問詞疑問文と同じに扱うことができる。修辭疑問文

5 2012年3月10日に東京六本木で行われた「池上彰×津田大介 in ニコファーレ～情報で世界は変わるのか～」の終了間際のやりとり。

テキスト：<http://news.nicovideo.jp/watch/nw215051/13>

動画：<http://live.nicovideo.jp/watch/lv82788026?po=news&ref=news#0:01:27>

は主張を表すので、形は疑問文でも疑問文とは言えない。間接疑問文は、疑問詞を用いるだけで、疑問文ではない。

3.1 諾否疑問文

	平 叙 文	疑 問 文
肯 定	This is a pen. これはペンである。	Is this a pen? これはペンであるか。
否 定	This isn't a pen. これはペンでない。	Isn't this a pen? これはペンでないか。

上記のとおり、英語では語順の入れ替えによって疑問文を作る⁶ため、文法として整理して示す必要がある。本稿は英文法の参考書ではないので、これ以上の詳細は省くが、can や may, should などの助動詞も上記 be 動詞と同様の振る舞いをする。また、一般動詞の文であれば do や does といった助動詞が加えて用いられる。

これに対し、日本語の疑問文⁷は、文末に終助詞「か」を添えるだけで表され、極めて単純である。

疑問詞を使わない疑問文が、ほぼ諾否疑問文 (Yes-no question) に相当する。すなわち、Yes か No で答えられる問いとは、「～であるか。」または「～でないか。」という問いである。

3.2 疑問詞疑問文

疑問詞を用いる疑問文が疑問詞疑問文である。疑問詞の代表的なものが、以下に示す 5 W 1 H である。

5 W	When	いつ	時
	Where	どこで	場所
	Who	だれが	主体
	What	なにを	対象
	Why	どうして・なぜ	理由・根拠
1 H	How	どのような・どんな・どういう (もの)	様態 (状況・状態・結果)
	How to (do)	どのように・どう (する)	手法 (手段・方法・仕方)
	How many	いくつ (何個)	数
	How much	いくら (何円) / どんなに・どれほど	量・金額 / 程度

6 本稿では書き言葉に限り、話し言葉は考慮に入れない。話し言葉の疑問は音調のみで示されることも多い。

7 日本語でも疑問は音調のみで示され、終助詞「か」は省略されることがある。

ビジネス上の取引（発注等）では、「数量」と「金額」が特に重要であるために5W2Hとされることも多いが、HがHowであることには変わりがない。

上記以外にも個別的かつ特殊な事情に応じて Which, Whether, , …… /How old, How long, …… など様々に考えられよう。

また、「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どのように」「どうした。」の5W1Hの順が、日本語の自然な語順である。昔話の冒頭「むかしむかし あるところに おじいさんとおばあさんが なかよく くらしていました。」の順である。もっとも、強調したいものは前方に出やすいし、主語や目的語が「は」で取り立てられると前方に出やすくなるなど、日本語の語順は比較的自由である。

5W1Hのうち、「いつ、どこで、だれが、なにを」は関与者をあげ、事実、特に出来事をとらえるものである⁸。

そして、「いつ」に対しては時間が、「どこで」に対しては場所が、「誰が」に対しては主体が、「なにを」に対しては対象がそれぞれ対応する。以上のとおり、疑問詞疑問文は一問一答式で答えることが可能な問いである。可能性の中からの択一式と言っても良い。

上に引いた杉原は、次のように述べている。

「論文で報告しようとしている研究成果については、「誰が」は「著者が」であり、「いつ」は「その論文を書いたとき」であり、「どこで」は「著者の所属機関で」であることが明らかだからである。したがって、タイトルでは、残りの三つの「何を」、「なぜ」、「いかに」研究したかの説明に注意を集中すればよい。⁹」

ただし、諾否や一答により答えが得られたからといって、分かったことにはならないことがある。どうしてそれが答えになるのかが分からなければ分かったとは言えないからである。これは数学を考えれば分かりやすいだろう。正解だけを与えられても理解はできないし、正解を述べても、どうしてそうなるのかの説明ができなければ問題を解いたことにはならない。途中式を示す必要がある。

以上、諾否や一答ではなく、答えがどうしても説明になるのはWhy（なぜ、どうして）とHow（どのような、どのように、いかなる、いかに）の二つであることは言うまでもない¹⁰。なお、「いつ」「どこで」「誰が」「何を」については、明確に分かれているように見えるが、以下に述べるとおり、WhyとHowについては地続きにつながっている¹¹と考えた方が良いでしょう。

8 当然のことながら、常に5W1Hのすべてが完備されるというわけではない。とらえようとする対象事象ごとに内容は異なる。「いつ、どこで、だれが、なにを、どうした」となるのは、人などの主体が関与する場合であり、「どうした」が自動詞ならば「何を」は現れないし、対象が事故ならば「いつ、どこで、何があった」となって「だれが」は現れないことがある。

9 前掲注2 p.26.

10 Why（どうして）がWhat for（何のために）で言い換え可能なことがあることを考えると、What（何）も考慮に入れた方が良いでしょう。

11 たとえば、「ナナカマドはどうして燃えにくいのか」はWhyの問いであるが、「ナナカマドはどのようにして燃えにくくしているのか」とすればHowの問いになる。

「それはどうしてか」という問いは「事由を問う問い」である。「それはどのようなか」という問いは「実態を問う問い」と言って良いであろう。Why を述べるには報告者の分析力が問われ、How を述べるには報告者の観察眼が問われる。

また、数学の例で述べたとおり、出発点となる最初の問いは、必ずしも「どうして」や「どのような／に」である必要がないことも分かる。一定の解答が得られた後で、「どうして」その結論になるのか、「どのように」その結果に至るのかが二番手三番手の問いとして現れれば、考えは深めていける可能性がある。

4. 答え方の分類

このことについて考えるために、筆者はすでに『ノーベル賞受賞者にきく 子どものなぜ？なに？』¹²をもとに、不完全ながら答えの類型化を試みた¹³。

この予備調査において、筆者は解答の類型として、(1) ①「機能や役割」②「利点や効用」③「用途や目的」と、(2) ④「原因または要因」⑤「システムやメカニズム」の大きく二つを得ている。

厳密な区分はもちろん難しいが、(1) は、おおよそ「何かをするために (③用途や目的)」として語る事ができるものであり、Why の答えに当たる。(2) は、おおむね「どのようにしてそうなるのか」、「いかにしてそれが起こるのか」といった How の答えに当たるものである。そして、(2) ④の「原因または要因」は、Why の答えにも How の答えにもなり得るものである。

(1) においてニュートラルに物事を語る場合には、単にこれこれのことをしているといった①役割や機能の説明になる。

たとえば、植物の葉緑素が日光を電気に変え、空気と水から炭水化物を作っているというのは、葉緑素は何をしているか（葉緑素とはいかなるものか）という問いへの答えである。これに対し、葉緑素が、どのようにして日光を電気に変えるか、どのようにして空気と水から炭水化物を作るかという経路を尋ねる問いへの答えは、How の答えに当たる。

空気とはどういうものかへの説明として、天候を決める、地球をあたたく保つ、生物に有害な紫外線を吸収する、生物が呼吸する酸素を供給するなどをあげることも、空気は何をしているか（空気とはいかなるものか）という問いへの答えに当たる。

ちなみに、空気（大気）は、地球ができたときから徐々に成分が決まり、植物をはじめとする生命体の活動によってその成分比率が維持されているが、このような説明は「空気は何から（どのように）できているか」の説明（Howの答え）であって、空気がどんな役割を果たしているかの説明ではない。

12 ベッティーナ・シュティーケル編、畔上司訳（2003）主婦の友社刊。

13 高松正毅（2007）「説明」はいかなる形をとりうるか『国語学 研究と資料』第30号 pp.67-81.

「何のために」で語ることができるというのは、②利点や効用を持つということでもある。こんな良いことをしている、こんなメリットがあるといった説明になる。

ただし、用途や目的として積極的かつ明確には語れない場合がある。そんな場合には、それがあつた方が良く、それがないとまずいことが起こるといった説明法をとる。

たとえば、どうして男と女がいるのかという問いには、男と女がいることに何らかの目的があるというよりも、男と女がいた方が良く、男と女がいないとまずいといった説明になる。

無性生殖の場合、子は親のクローンとなつてしまい、病気がはやつたり、環境が激変したりすると全滅してしまうリスクが高い。クリスティアーネ・ニュースライン＝フォルハルトは、この実例としてアブラムシをあげている¹⁴。

③用途や目的としての最も典型的な答えは、たとえば、生物の中にはどうして擬態を行うものがあるのかという問いに対し、「天敵から襲われにくくするため」という答えが与えられる（ナナフシやカレハガなど）、あるいは、「えさを採りやすくするため」という答えがプラスされる（ハナカマキリなど）ようなものである。

(2) は、たとえば、どうして人は病気になるのか、どうして戦争はおこるのかといった問いへの答えである。この④「原因または要因」の答えは、表現としては上記 Why に似て「何かがあるために、何かをしたために」こうなる（＝事ここに至る）という形式をとる。

⑤の「システムやメカニズム」は、どのようにしてそうなるのか、いかにしてそれが起こるのかへの答えである。「このように」してこうなるといった説明になる。

＜問いと答えの対応のまとめ＞

疑問詞	答え方の分類	典型的な表現例
Why	①「機能や役割」	～する。～（が）ある。～できる。
	②「利点や効用」	
	③「用途や目的」	
Why & How	④「原因または要因」	～（を）したために、～（が）あるために、
How	⑤「システムやメカニズム」	こうなつて、（こうなる。）こうして、（こうなる。）

5. WhyとHowで問え

文章から単なる記述や描写を除くと、解釈や分析等、筆者の考えが含まれた内容になる。その際、主として書かれる書き方には、大きくは二つしかないと言ってよい。

それは、(1)「事実から考えを導き出すもの」と、(2)「事実と事実を結びつけるもの」の二つ

¹⁴ 筆者は最近ダン・コッペルの『バナナの世界史』（太田出版）を読み、バナナがこの好例であることを知った。バナナは完全な無性生殖の植物で種は存在せず、株分けによって増やす。実際にグロスミッチェル種はカビの一種バナナ病により絶滅してしまった。現在我々が食べているのはキャンベンディッシュ種で、ひとたび同様の病気が蔓延すれば、ひとたまりもない。

である¹⁵。(1)と(2)がさらに下位分類される。

あらゆる思考には事実が先行している。つまり、何の事実もないところに思考は生じ得ない。すなわち、ある事実を取り上げて、そのことに対する考えが述べられる。

ただし、文章の書き方においては、事実と考えのどちらが先に書かれても構わない。つまり、具体例を先に挙げて帰納的に一般論を引き出しても良いし、先に一般論を抽象的に述べて具体例を挙げて補強しても良い。

この事実と考えの連関が緊密化して、具体例が根拠となり、一般論が結論となって論証となることがある。この場合も、先に根拠を述べてから結論を述べても良いし、結論を先に述べてから根拠を説明しても良い。

さて、この点に注意していただきたい。論文(文章)は、たしかに筆者の考えを述べたものなのであるが、筆者の思考がたどった筋道を、そっくりそのまま再現して記されたものではないということである。

(1) 事実から考えを導き出すもの	具体例を先に挙げ、帰納的に一般論を引き出す
	一般論を抽象的に述べ、具体例を挙げて補強する
	具体例が根拠となり、一般論が結論となる(論証になる) (述べ方は「根拠→結論」でも「結論→根拠」でも良い)

(2)の「事実と事実を結びつけるもの」には、二つの事実のうち一方が原因でもう一方が結果である因果関係を結ぶ場合がある。薬を飲んだ(事実)から症状が治まった(事実)、勉強をしなかった(事実)から点数が悪かった(事実)といったようなものである。この場合、考えは接続助詞や接続詞に集約されていると言って良い。また、原因と結果の結びつきには強弱がある。なお、この世に生起する事象のほとんどは複合要因であって、単一要因であることは少ない。

もう一つは、二つの事実に相関が見られる場合で、どちらかがどちらかの原因になっているわけではない場合である。

これら二つとは別に、事実と事実を比較対照して考える場合がある。

たとえば、ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発見したと言われている。ただし、ニュートンの思考では、上記(1)のように「リンゴが落ちる」という事実から「地球には引力が働いている」という考えを直に導き出したわけではない。ニュートンは、月や星は落ちてこないのに、どうしてリンゴは地表に落ちるのかと考えた。すなわち、リンゴと月や星を比較対照して考えた。なお、リンゴが木から落ちるのはいわば当然のことであり、当然のことに疑問を差し挟むのは容易なことではない。

15 「考えから考えを導き出すもの」は、先行する考えが仮定や前提条件となる場合であることから「事実から考えを導き出すもの」と同じに考える。「考えと考えを結びつけるもの」は、既存の考えを客体化して扱うので「事実と事実を結びつけるもの」と同じに考える。

(2) 事実と事実を結びつけるもの	一方の事実が原因で、もう一方が結果である因果関係
	二つの事実に何らかの相関が見られる関係
	事実と事実を比較対照し、結びつけて考える

また、ここでもニュートンが書く「引力の論文」には、ニュートンのたどった思考の過程がそっくりそのまま復元されて明示的に書かれるわけではないだろう。そんな書き方をすれば、論文は読みにくくて仕方がないはずである。というより、「引力の論文」を書くのに、りんごについて言及する必要は一切ない。

以上、長々と述べてきたが、得られる結論は極めて陳腐なものとならざるを得ない。論文執筆上のアドバイスとしては「Why (What for) で問え、How で問え」ということになる。ただしそれは、いきなりそう問うのではなく（というより、いきなり Why、How では問えないであろう）、一定の事実を発見し、ある結論を確実に得てから、さらに Why、How で問い詰めろということになる。

また、問うことで重要なのは、当然のことと思われることを疑ってみることであり、その際に有効なのが、一見全く関わりのないように見える他の事実と考え合わせることである。ただし、木から落ちるりんごと、決して落ちることのない天空の月や星とを比較対照して考えることにはかなりの飛躍がある。この飛躍の技術化・定式化は極めて困難であろう。

なお、「一定の事実を発見し、ある結論を確実に得てから、さらに Why、How で問い詰めろ」ということに関し、海洋生物学者の佐藤克文は次のように述べている。

「最初の頃は、いいデータが取れたとしてもそれを解釈する視点を持っていなかった。(中略)でも、とにかくしつこくデータを取り続けるうちに、いつのまにか意味がわかってきたんです。ペンギンがいろいろ小細工しているんだよな、と。浅く潜る際には浮力をあまり増やさないように空気を吸い込む量を減らすだとか、深く潜る時には水圧で空気がつぶれて浮力がなくなってしまうのだから思い切り吸い込んでも構わないだとか、ペンギンが意図して空気量を調節しているんだとわかった。

最初は、自分の取ったデータは世界ではじめて記録された現象であるというだけで興奮していたんです。だけど、その段階から、意味がわかるという段階に進むことができたわけです。二次的に発見するということですかね。こちらのほうがより重要なんですよ。データを取って二年も三年も経ってからですから、ずいぶん時間がかかったんですけどね。¹⁶⁾

16 木村俊介 (2012) 『「調べる」論 しつこさで壁を破った20人』NHK出版新書 (387) pp.123-4

論文における「問い」と「答え」の対応をめぐって (高松)

本件については、特に人文・社会科学系の実際の論文を集めながら今後とも考え続けていきたい。
ところが、論文は思考の過程をそっくりそのまま再現したものではないことも確かである。したがって、優れた論文を読むことでその論文がどう書かれているかを知ることではできても、どう考えればそうした優れた論文を書くことができるかに迫ることはなかなか難しいかもしれない。

(たかまつ まさき・本学経済学部教授)